

# 忘れられない本

福元 貴子



幼い頃、布団の中で母に読んでもらう本、よく

途中でとぎれ、母をゆり起こす―本に関する私の  
思い出です。そんな私にとって、幼稚園で子ども  
と絵本を見る時間は、私自身も楽しいひとときで  
した。約十二年間の幼稚園教諭としての生活の中  
で、子ども達と読んだ忘れられない本をご紹介します。  
ようと思います。

『きよだいな きよだいな』

長谷川摂子／作 降矢なな／絵 福音館

「あつたとさ あつたとさ ひろい のつぱら

どまんなか きよだいな……」 「こどもが 一〇

〇にん やつてきて……」の繰り返しがおもしろ  
いリズムカルな絵本です。

この絵本を読み聞かせている時、本の半ば程  
で、子どもが「きよだいな」ってすごく大きいっ

\*

てことなんだ」と納得したといった口調でつぶやいたのです。新しい言葉を子どもがどのように自分のものにしていくのかのついに気付かされた思いがしました。子どもと言葉との出会いという意味で忘れられない一冊となりました。

『ラチとらいおん』

マレーク・ペロニカぶん・え 福音館

犬も暗やみも友達も恐く、いつも仲間はずれにされて泣いているよわむしのラチ。そのラチが、小さな赤いらいおんの助けを借りてどんどん力をつけ、いじめっこをやりこめるという話です。

園で絵本の貸し出しを行っていたのですが、この小さな絵本が大好きでよく借りる女の子がいました。この子は、一見ラチとは正反対。しっかりしていて明るく気も強く、どちらかといえば周りをリードして遊ぶ子でした。初めは、そんな子がどうしてこのよわむしのラチの本を繰り返し借り

るのだろうと思っていました。彼女をよく見ていると、そのしっかりした姿は彼女の一面で、その裏面には弱さもあって、ラチと自分を重ねながら頑張っているのでは……と思われました。子どもの内面に会わせてもらったような一冊です。

『ごきげんいかが』

五味太郎 リブポート

これはカード絵本です。人の顔の形にくりぬいたカードを、おちば、すいか、うち、さかな等のその他の絵のカードに重ねると、その絵はいろいろな表情の顔になります。絵カードにそえてある「……ごきげんいかが」という言葉にあわせてカードを重ねると現れるいろいろな表情の顔に子ども達は大喜びです。カードなので、逆さまにしたりずらしたりして重ねることで、また異なった表情にもなり、それも魅力です。

入園当初、この本を言葉に節ふしをつけて読むと、

毎日「読んで」とせがまれました。そして、自分達でもやってみようと、数人が集まって私が読んだのと同じような節まわしでカードを重ねてみて笑い合っている楽しそうな様子がみられました。

入園当初ということもあり、それまでは子ども同士一緒の場においてもどこかぎこちなかったのが、この一冊の本を通して、自然に気持ちがふれあっているようで、そんな絵本のもつ力を感じました。

### 『けんたうさぎ』

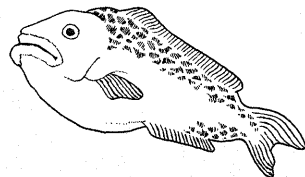
中川李枝子／作 山脇百合子／絵 のら書店

きのうはいたずら・うさぎ、きょうはあべこべ・うさぎ、けんたうさぎは、毎日いろいろなうさぎになります。そして、リズムカルな文で描かれたけんたうさぎの楽しそうな様子や、おかあさん、おとうさんのやりとりは、読んでいると心がほんわりと温かくなってくるようです。

四歳児に絵本ではない童話を初めて読む時は、

きいていられるかな、大丈夫かなとちよつと心配なのですが、この『けんたうさぎ』は一度で子どもの心を捉えました。けんたうさぎがなるいたずら・うさぎやあべこべ・うさぎ、きえた・うさぎ、おそみみ・うさぎ

は、大人からみれば、時には困ったことになるのですが、子ども達にとつては魅力的です。いつもは絵本でもちよつと長いものになると落ち着かない子どもも、この本は別でした。読む時間がなくなるらないように一生懸命片付けて、「今日は○○うさぎのところだよ」と言ってくるというぐあいでした。お話の楽しさを子ども達に教えてくれた一冊でした。



\*

今、私は退職して一歳の娘と過ごす毎日です。初めて自分でページをめくった本、繰り返し楽しんでいる本等、母として忘れられない本がでてきました。最近、何冊もある絵本の中から娘が

「はい」と持ってくる本が数冊決まってきました。これからの娘との生活の中で、どんな忘れられない本がでてくるのか楽しみにしている今日この頃です。

(元公立幼稚園教諭)

## 犬丸りんと

# 香川県健康福祉総務課のホームページ

山本 政人

最近本を読まなくなりました。読むのは新聞、雑誌、漫画、そしてインターネットのホームページ

である。仕事柄、学会誌などはよく読む。というより目を通す。趣味あるいは娯楽として読むの